

饒舌

芥川龍之介



始皇帝しくわうていがどう思つたか、本を皆焼いてしまつたので、神田かんだの古本屋ふるほんやが職を失つたと新聞に出てゐるから、ひどい事をしたもんだと思つて、その本の焼けあとを見に丸まるノ内うちへ行かうとすると、銀座尾張町ぎんざをはりちやうの四よつ角かどで、交番の前に人が山のやうにたかつてゐる。そこで後うしろから背のびをして覗のぞいて見ると、支那人シナじんの婆ばあさんが一人巡査ひとりの前でおいおい云ひながら泣いてゐた。尤も支那人と云つても、今の支那人ではない。平福百穂ひらふくひやくすゐさんの予讓よじやうの画からぬけ出したやうな、古雅こがな服装をした婆さんである。巡査はいろいろ説諭をしてゐるが、婆さんの耳には少しもそれがはいらならしい。何しろあんまり婆さんの泣き方が猛烈だから、どうしたんだらうと思つて見てゐると、側にゐたどこかのメツセンチア・ボイふたりが二人でこんな事を話してゐる。

「あれは丸善まるぜんの金きんどんのお母つかさんだよ。」

「どうして又金きんどんのお母つかさんがあんなに泣いてゐるんだらう。」

「なにね、始し皇くわう帝ていが今け日ふ東京中けいの学がく者しやをみんな日ひ比び谷や公園こうえんの池いけへ抛なりこんで、生い埋きうめにしちまつたらう。それで金きんどんもやつぱり生せい埋めいめにされちまつたもんだから、それであんなにお母おさんかみが泣ないてゐるのさ。」

「だつて金きんどんは学がく者しやでも何なんでもないぢやないか。」

「学がく者しやぢやないけれど、金きんどんはあんまり生な物もの識しりを振はまはすから、丸善まるぜんぢや学がく者しやつて綽あ名だがついてゐるんだよ。だから警けい察さつでも大だい学がく教きやう授じゆや何なにかの同どう類るいだと思おもつて、生せい埋めいにしてしまつたのさ。」

するとその隣となりの、小倉こくらの袴はかまをはいた書しよ生せいが、

「怪しからんな。名の為に実を顧みないに至つては閥族の横暴も極れりだ。」と憤慨した。

自分もそれは乱暴だと思つたから、

「実に怪しからんですな。」と書生の憤慨に賛成の意を表した。書生は自分の賛成を得て大に知己を得たやうな気がしたのでらう。彼は自分の方をふりむくと、滔々としてこんな事を辯じ出した。

「万事この調子だから驚くです。かう云ふ事には最も理解がある可き文壇でさへ、イズムで人間を律しようとするんですからな。一度新技巧派と云ふ名が出来ると、その名をどこまでも人に押しかぶせて、それで胡麻をする時は胡麻をするし、退治する時は退治しようとするんですからな。我々青年はまづこの弊風を打破しなければいかんです。僕はこの間博浪沙

で始皇帝しくわうていの車に鉄椎てつづいを落させました。不幸にしてそれは失敗しましたが、まだ壮心が衰へた訳ではありません。」

かう云つて書生は、群集ぐんしゆを磨さしまねきながら、

「諸君、憲政の擁護の為にあの交番を破壊しようではありませんか。」と絶叫した。

それに応じてどこからか石が一つ斜ななめに空くうを切りながら、かちやりと音を立てて交番の窓硝子ガラスへ穴をあけた。その音で気がつくと、自分は依然としてカツフエ・パウリスタのテエブルに坐つてゐる。かちやりと云つたのは、珈琲コオヒイの匙さじが手から皿の上へ落ちた音らしい。自分は黒いモオニングを着た容貌くわいじゆ魁梧くわいじゆな紳士と向ひ合つた儘、眼を明あいて夢を見てゐたのである。紳士は自分が放心から覚めたのを見ると、

「新年の新聞に何か書いてくれませんか。」と云つた。

「この頃は何も書きたくないんだから駄目です。」

「そんな事を云はずに何か書いてくれ給へ。何でもいいので
す。たとへば「新技巧派について」と云ふやうなものでも。」

自分はぎよつとした。事によるとこの紳士は自分の夢を知
つてゐるのかも知れない。

「それでなければ「旧技巧と新技巧と」はどうです。」

「駄目です。第一新技巧などと云ふ事は考へた事もありやし
ません。」自分はぶつけるやうに云つた。

「しかし何か書けるでせう。」

「書けば、あなたに頼まれて書くと云ふ事を書くだけです。」

「それでもいいから、書いてくれ給へ。」

紳士はポケットを探つて、原稿用紙と万年筆とを出した。

外では歳暮大売出しの楽隊の音がする。隣のテエブルでは誰

かがケレンスキイを論じ出した。珈琲コオヒイの勻にほひ、ボイの註文を通す声、夫それからクリスマストリイマツトツツ——さう云ふ賑かな周囲の中に自分にがは苦い顔をして、いやいやその原稿用紙と万年筆とを受取つた。それで書いたのが、この何枚かの愚にもつかない饒舌ぜうぜつである。だから孟浪まうらうづざん杜撰とせんの責せめは寧ろむし今自分の前に坐つてゐる、容貌くわいご魁梧くわいごな紳士にあつて、これを書いた自分にはない。

饒舌

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
1971（昭和 46）年 6 月 5 日初版第 1 刷発行
1979（昭和 54）年 4 月 10 日初版第 11 刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007 年 6 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。